

〇さんの語り (大島青松園)

大島に来たのは18か19歳で、まあ若かったし、ほんまに子ども心で。一つ言えば、わしの親父がもう年がなんぼくらいやったかな、63、65歳ぐらいやったと思う。昭和22年頃やったと思うんじゃないけど、その頃は戦争も終わって、やっとこれから日本も良くなるのかなーという時期やった。中学3年を卒業して、もう学校も卒業したし、これから何をしようかなと思っていた時期やった。四国の山の中におって、川に行って魚も捕ったりして遊んだ記憶が浮かんでくる。私が一番残念なのは、県の予防課におったA先生が診察して、「僕が診^みた限りでは〇君はハンセン病になっとるけん、香川県にハンセン病の療養所があるので、早くそこに行って早く治療してもらったらどうだろうか」って言われたことや。A先生という人は、後から聞いた話では、最初、大島青松園におって、それから県庁に来た先生らしくて、らい患者のことをよく診察してくれて、患者の実家にも行って面倒を^{じか}みたり、直に話をしてくれたりする先生やったそうじゃ。俺もハンセン病という病気のことを詳しく知らないので、A先生に「先生、これから先どうしたらいいんだろうか」って話したら、「それは〇君、1日も早く行って、今は昔と違っていい薬もあるし、できれば早く行ってくれよ」っちゅう話を山の中でしてくれたことを昨日のこのように思い出すのう。こんな話をしてからもう半世紀以上が過ぎてしもうた。ほいで、「何でわしはこんな病気にかかったんだろうか」っちゅう話を、わしの親父^{おやじ}としたんじゃ。あれは何処^{どこ}ゆうたかの。何とかいう大きな山の向こうからまだ小さかったわしの面倒をみてもらうために、向こうも生活に困^ことるけん、

ねえねえ(=子守り)に来てもらっとったようじゃ。どうもその人がらい病だったようなんじゃ。わしはおやじに「おやじは何で自分のところにその子呼んで世話をしてやったんか。おやじが馬鹿みたいにそんなことをせんかったら、わしが病気になることも無かったじゃろうに」言うて話したことがある。わしはどうしてもこの病気になったことが頭から離れんけんのう。今でも時々そのことを思い出して考えるときがある。

親父は^{らい}癩^{らい}なんかい病気はそんなに人に^{うつ}伝染^{うつ}る難しい病気じゃねえと思^うとったみたいななんじゃ。まだ子どもが小さいし、同じ屋根の下で生活して居れば、伝染するんじゃないかちゅうようなことは、あんまりおやじは深々と考えたことも無かったようなんじゃ。「おやじはお人好しの貧乏^{ふこ}じゃあ。どうしてもうち^{ふこ}ちょっと深^{ふこ}う考えてくれなかったんならあ(=考えてくれなかったのか)」と思^うって、夕食を食べながらその話をすると口げんかになりよった。

園に来てからいうたら、長くなるけど、俺、半年かそこらは、毎日西の浜に行^いって高松の街ばっかり見^いつめてお^いった。そうしとったら、他の連中が「毎日毎日、松の根っこみたい^いなところに座^いって何をしよんや」って言う、「おら、何ちゃしよらん」。まあ、そんな日が6ヶ月くらい続いたのう。最初はもう「高松の港に上がった^いら、もう歩いてでも帰^いぬ」、そう思^いいよ^いった。そうこうしよる間にだんだん日にちが経^いてくると気持ちが和^いらいで。知り合いもできてきたし、あんまり今までのように西の浜に行かんようになってきた。ほんで部屋に帰^いって、みんなと一緒^いに飯を食^いったりする。まあ、あの当時はまだ此^こ処^こが麦飯を食^いわしよ^いったわ。それでも「これはもう、行きつくと^いころまで行きついたのう」思^いうて、みんなと一緒^いに麦飯

を食べながらそう思いよった。

それからそういう時期がだんだん過ぎて、年も20か21歳くらいになってきたし、みんなと一緒に「いっぱい飲まんか」言うて、飲み友達も増えてきて、ほんで、みんなとやいやい言いながら、酒飲んで。酒飲んで喧嘩する者もおったしのう。まあ、ここへ来てから半世紀以上の年月が経つんやのう。それからだんだん年取ってきて。

毎日、毎日もう真っ黒になって、海に行って潜って、タコを捕ったり、サザエを捕ったりして過ごしたことを今だに思い出すのう。あの頃は若い者が沢山おったし、タコとかサザエとかをつまみながら酒飲んでいろいろな話をしよった。みんなが寄ってきたら、「おお、食べんか、食べんか」言うてバケツに1杯も2杯も焼いて食う。日本酒飲んだり、焼酎飲んだり、もう、わや(=無茶苦茶)や。そんなことしよりゃ、酒買う銭が無くなったもんじゃけえ、「おやじ、おらもう何ちゃ買う銭がないけん、酒代でも送ってくれや」言うて飲んだ。ほんで、毎日毎日酒ばっかし飲みよったら、「もう長生きはせやせんぞ。飲むなどは言わんけん、もうちっとほどほどに飲まな駄目」いうて親父に怒られたことを覚えとる。若いけん、毎日あの頃は若い者が沢山おって、いつも面白かったのう。他のことは、えらい目ばかりして面白いことなんか一つもなかったけんどのう。大島に来てからは、酒飲んだり食うたりしたことが一番の思い出やのう。他には何ちゃ無い(=何も無い)。

わしは此処に来て、色々なことがあったけんども、人間は何処に行っても苦勞はある。大島に来てから、独りで住んで居るのは、まあ呑気といえど呑気。「何ちゃあ心配事が無かろうが」言われたこともある。今考えてることは、やっぱり、人間は健康でなかったら駄目。健康であつたら

何でも自分で出来るし、人の手を煩わすことはない。健康というのは素晴らしいと思うのう。今思い起こすと、若い頃、30歳頃が一番楽しかったな。34～35歳あたりになってくると、人間に欲が出て、「外へ行って、親が生きてるうちに何か仕事でもしようか」いうような気持ちになった。やっぱり若さがないと駄目な。年取つたら、若さがあつたら何でもやろうと思って自分から希望持っておれるけん、だんだん年を取るにしたがって「あれしよう、これしよう」いうような希望がだんだん無しになってくる。お互いに此処に居る患者さんたちはみんなそうだろうけん。「俺はなして(=どうして)此処に来て、くよくよだらんこと考えて、どうして此処に住んでおらな駄目だろうか」と考える。親父もそうこうしよるうちに年取ってきたし、甥らはだんだん大きくなって働けるようになったけん、それは心配せんでもよくなってきたけん。一番駄目のは、わしらの住んどった家がだんだん古うなって来とった。そうやけん、親父が元気なうちに、家を1軒建ててやろうかと思った。まあ2～3年もあればできるだろうと思うてのう。Tという親方にその話をしたら、「帰ってくるんなら、2年でも良いけん帰ってきて家のことしてやれや」言うてくれて。「するにしても、銭が無かったら出来へんが」いうたら「あんじょう(=良い具合に)貸してやるけん、どうにかなるわ」言うてくれて。そうこう考えとるうちに親父が死んでしもうた。親父は80歳過ぎで死んだがよ。「そうか、おれの親父はずっと一人身やったけど、いろいろなことを考えてやってきたんだらうなあ」と、そんなことを思いよつたら、「よし、親父は80何歳で死んだが、俺は頑張ってハンセン病という病気であつても頑張って生きようかな。誰でもそうやけど、人間は死んでしもうたら何ちゃにならん。

そこらに転がってる石ころと一緒にになるわ」と
思うて考え直して生きることにしたがよ。

年取って50歳に近うなってきたら、「実家に
帰っても大したことは出来ん」思うて、防波堤で
独りでいろいろなことを考えて、諦めた。

特に^え良いことも無かったけど、これと言うて
悪いこともなかった。今日まで生きておって、
こんなことがわしの最後のちっぽけな喜びで
あるかもしれんな。若かったら（故郷に）帰り
たいわ。まだ30歳ぐら이었다たら帰りたい。

「大島青松園で生きたハンセン病回復者の人生の語り
（2015年12月15日発行）より、一部抜粋して掲載

Kさんの語り（大島青松園）

10歳頃までは何不自由なく暮らしていたことは
覚えているね。どうも小さい頃は可愛かったみた
いで「ちょっとこの子貸してくれ」言うて奪い合う
ようにして子守りしてもらいよったげな。自分の
一番良い思い出は11歳までやと思う。子どもの
時が一番、幸せだった。発病当初は「何が何でも
治さん^{いかん}と駄目^{たいふうし}」と思ったんよ。で、大風子（=大風子
油）を自分で^こ買^こうてね、打ちよったんよ。素人が
注射するんじゃけん、化膿してばっかり。2、3回
してやめた。今も^{あと}痕が残^{あと}とる。ほんでね、この
病気やったら〇〇教がいいとか、四国遍路が
いいとか石鎚さん^{いしづち}（=日本七霊山の一つ霊峰石鎚
山）に参^{まゐ}たらいいとか、お猿の頭を煎じて飲ん
だら治るとか、いろんなこと言うてくれる人が
^お居^おるわ、親切か何かしらんけど。〇〇教は家から
一里もない所にあるけん、だいぶ続けて行^えった
で。「このノートに書いとることを暗記したら良い」
って言われて、行き帰りに暗記した。治ると信じ
てね。半年くらい通ったら、「近畿の本部へ行^えって
くれ」って言い出したんよ。それで、おかんが「もう
此^こ處^こでは駄目^{いかん}、行^こっても無理や」って言い出し
たんよ。ほんでもう、「それなら療養所^{りやうようし}に行くわ」
言うたんよ。ここに^お居^おっても金ばっかりいるんで。
裕福な家でもないしね、うちは。それで大島に
来たんやけど、一番最初は「高松は綺麗な街や
なあ」と思った。ほんで「大島もきれいな島やろう
なあ」って思^しって入^しってきたら中はひどいもん
やったなあ。当^し時は部屋に入^しったら畳は真っ黒
で、じと〜と湿^しつけた感じ。畳の縁のない柔道の
畳^しみたいなやつなんよ。ほいで汚^しかったで。朝、
布団あげたら、みんなで「1、2の3^{ほうき}」で箒^{ほうき}で掃^{ほうき}

